

---

# 白の勇者、あるいは絹のように滑らかな

義雄

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

白の勇者、あるいは絹のように滑らかな

### 【Zコード】

Z8967Y

### 【作者名】

義雄

### 【あらすじ】

平賀才人は気がつけば変な草原にいた。変な外国人集団も近くにいた。何故か彼は口を動かせなかつた。

肉食系女子ばかりです。でもある意味草食系。すごくシユールでカオスなコメディ。最初に言つておきます、「ごめんなさい。当SSはArcadia様にも投稿しています。

(前書き)

肉食系女子ばかりです。でもある意味草食系。すこシユールでカオスな「メティ。最初に言つておきます、ごめんなさい。

「あんた、なに？」

それはこっちの台詞だ、平賀才人は言い返そうとして、口が動かないことに気づいた。

慌てて辺りを見回すと全く知らない景色が広がっていた。  
まず広い。ありえない。

さつきまで彼は秋葉原を歩いていたはずだ。  
ノートパソコンの修理が終わって、意氣揚々と家に帰ろうとしていたのに。

気づいたらよくわからないカラフルな頭をしたヤンキーボーにも囲まれてる。

しかも魔法学校っぽいコスプレしてるヤンキーズ。  
でもイメージ的にアメリカンよりもヨーロピアンっぽい。

遠くには変な石造りの塔が見えるし、映画のロケ現場にでも迷い込んだのか俺？ ああ、噂のテレビショッティヤツだ、間違いない。

混乱しながらも、才人は自身の中でなんとか折り合いをつけ、目の前の少女を改めて観察した。

可愛い、見たことないくらい可愛い。

映画俳優なら可愛くて当然か、賢者のストーンとか秘密のルームに出てきた子もすんげー可愛かったし。と自分の推測が正しいことを確信する。

しかも髪の色がすごい、こんなに綺麗なピンクブロンドは、漫画やアニメの中でしか才人は見たことがなかつた。

欲を言えばもっと胸があればよかつた。

心の内を覗いたかのように、少女の眉が少し釣り上つた。

ついでに周りのモブっぽい人々にも目をやる。

みなさん困った顔というか、どうコメントしていいのかわからぬ顔をしていた。

あ、そうか。撮影現場に突然現れたらそりゃびっくりするよな。  
一人納得していると、若干頭部に哀愁漂う中年の男性が近づいてきた。

見た目はベテラン俳優のようで、才人は声をかけようとした。  
やつぱり声は出なかつた。

「ミス・ヴァリエール、早く契約を」「  
でも、これ……なんか変ですよ。ふるふるしてるし」

失礼な、俺は中肉中背だ！

男性の言葉よりも、少女のふるふるしているといつ言葉に才人は反応した。

彼は身長も普通なら肉付きも平均的、身体的には至つて特徴のない男子高校生だ。

黒髪黒目で日本人的な顔つきが変わつてゐる、といつながらまだしもふるふるとは。

服装も青と白のパーカーで、そんな変な形容をされるようなものではない。

才人が憤慨していると、話し合いを終えた少女が膝について言った。

「オスかメスかもわからない変なのだけ……仕方ないか」

少女の言葉は、彼を人間扱いしていなかつた。

ぶつぶつと呪文らしきものを呴いて、少し途方にくれた顔をしながら、才人にキスをした。

これに驚いたのは才人である。

映画のロケ現場にいきなりワープしたかと思いきや、俳優にキスされた。

なんてこつたい、これはスクープとかスキヤンダルじゃないのか。さらに驚くべきことに、少女の唇はかなり熱かつた。

仰天すべき事態は続くもので、左手に激しい痛みを感じる。

直火で焙られたようなそれに、才人は意識を手放すほかなかつた。少女が唇に着いた白いモノを舐めとる仕種が、いやに印象的だった。

\* \* \*

田覚めると見知らぬ中世ヨーロッパ風の部屋だつた。

新世纪なアニメでおなじみの言葉を吐こうとして、口が動かないことを思い出す。

どうなつてゐんだ、とため息をつきたかつたが、呼吸すらできなかつた。

ひんやりとした石の床から起き上がる。手を見ると、真っ白だった。

なんだこれ。

見覚えのある原型を一切とどめず、どこかコミカルな手になつていた。

視線を体に近づけていくと、腕はラクガキみたいな細さ。さらに脚は某ネコ型ロボットのように白く、丸い。部屋の化粧台に才人は駆けより、鏡を覗き込んだ。

なんだコレ！？

四角くて白い、謎の物体がそこには映つていた。右手を動かせば鏡の中で左手が動く。間違いなく才人本人だ。だが、一体コレはなんなのか。才人の記憶に似たような質感を持つ物体がある。

『豆腐だ。しかも絹ごし。』

平賀才人は何の因果か、人間大の豆腐になつてしまつた。口どころか目も鼻も髪の毛も、耳までない。どうやって音を聞いているのか、ものを見ているのか、かなりの謎だ。

とりあえず喋れることには納得した。

ペタペタと頬に相当する部分を触つてみる。ふるふるだつた。これはふるふるしていると言われても仕方がない、と変に納得した。

左手を見ると、そこだけ焼き豆腐のよつた焦げ目がついてる。

『巖驛亞瑠武』

非常に男らしい文字だった。

どうすればいいんだろう、と悩んでいると部屋の扉が開く。才人にキスをしてきた少女が入ってきた。

「あら、あんたもう大丈夫なの？」

おかげさまで、という思いは口にできなかつた。  
せめて動きで伝えようと、棒みたいな腕でマッシュルポーズを作つてみる。  
その動きに少女はくすりと笑つた。

「よかつた。いきなり倒れたから心配してたの。それに言葉もわからぬのね」

とてもない美少女だったが、微笑むとその可愛さが際立つ。  
あまり女性に免疫のない才人は顔を赤らめたような気になつたが、  
豆腐なので白いままだつた。

「夕食もうつてきたけど、食べる？」

勿論、と才人は答えたかつた。

しかしながら、今の彼は豆腐である。

空腹感はまったくないし、彼自身どうやって食べればいいのかわからぬ。

泣く泣く腕でバッテンを作つて辞去するしかなかつた。

「やつ。ていうかナ一食べるのあんた?」

そんなこと聞かれても困る。

ぱたぱた腕を振つて答えられない皿を伝えようとするが、少女には理解できない。

「……むしろ、生き物なのかしら」

肯定しようと勢いよく首を振る。

勢い余つてぐちゃつと白いものが少女の顔面にヒットした。

豆腐だ。

そりや絹ごし豆腐は柔らかい。崩れて飛んでいくのは必然だ。少女の顔をすり落ちていく絹ごし豆腐。ずべしゃと床に落ちて砕け散つた。

気まずい沈黙が部屋を包み込む。

「こんな時、どういう顔をすればいいかわからない。」

豆腐になつて、首肯したらお顔に直撃したという時、どういう顔をすればいいかわかる人などレッドデータブックに載せるべきだろう。

そんな才人の心中を知つてか知らずか、美少女はちらりと唇に着いた豆腐を舐めとつた。

「やつぱつ……」

ずいと近づいてくる。

女性に縁がなく、慣れがなかつた才人は思わず後ずさつた。

ピンクブロンドの少女は皿をひんやりと輝かせ一歩ずつ近寄ってくる。

近寄った分だけ才人は後退して、やがて壁を背負つてしまつ。

「あんた……」

はあ、と少女の吐息が体にかかる。

熱病に浮かされたような熱さと艶やかさを併せ持つていた。

「、これはいわゆる迫られてこうしてヤツですか！？」

外国人すげえ！と才人は歓喜した。

しかし、次に少女の口から飛び出た言葉にその歓びはしほみ、むしろ恐怖を覚える。

「美味しいわね」

蛇のように赤い舌がのぞいた。

食われる。

生物として本能的に抱く恐怖心。

それは捕食者に対するものである。

今現在、才人は被捕食者、目の前の少女は捕食者。

このまま動かなければどうなるか、結果はカマキリの交尾より明らかだつた。

「あ、待ちなさい」「うー！」

才人は脇目も振らず逃げ出した。

\*\*\*\*\*

熱い。

じりじりと熱が才人の肌を、豆腐ボディの表面を焼いていく。  
巖駢亞瑠武となつた彼の身体能力は凄まじいもので、魔法学院から火竜山脈までひとつ走りでやつてきた。

これも豆腐になつた恩恵に違いない。

だが、火竜山脈の環境は今の彼には過酷だった。

熱すぎる、アレか。俺に焼き豆腐になれつていうのか。それとも湯豆腐か。

ああ、冷水をたっぷり溜めた木桶につかりたい。違う。プールに飛び込みたい。

思考まで豆腐になりつつも才人はゆっくりと歩を進める。

この季節、火竜が盛んに活動しているが、不思議なことに彼は一切ちよつかいをかけられなかつた。

そもそもそのはず、生き物かどうかもわからない物体相手、しかも実力は未知数のヤツに好んで喧嘩をふつかけるヤツはいない。才人が火竜の巣に近づいていないのも幸いだつた。

しかし、いかんせん暑すぎた。

汗というか、水分がだらだらと抜けていき、このままでは高野豆腐のようにぼそぼそとした食感になるに違いない。

凍らせるのと熱で水分を抜くのは全く違うが、今の才人はそんな法則をぶつちぎってしまいそうだ。

もう、ダメだ。

バタリ、いや、ふるんと才人は倒れ込んだ。

岩肌で身体が若干抉れてしまつ。

そのまます、つゝと意識が落ちていき、最後に誰かの驚いた声が聞こえた。

\*

「気がつきました？」

才人が目覚めると、そこそこ広いテントの中だった。  
身体を起こして自分を確認する。

やつぱり縄ごしだつた。

水分がかなり抜けたせいで固くなつた、それでも文字通り豆腐の

ように白い肌はところどころ穴が開いている。

自分が意識を落としたところは岩が「ロロロロ」していたな、と思いつ出す。

次にテントの中と、声の主を確認した。

モンゴルとか、遊牧民のテントっぽいな。

国語や社会の資料集で見覚えのある造りだった。

ずっと昔、小学生のころ習った「スーカーの白い馬」というお話をうすぼんやりと頭を横切つた。

次に出てきたのは国語つながりか、コンパスみたいな足のヤンおばさん。

あの人は豆腐屋小町って呼ばれてたつて、俺は豆腐そのものだけど。

どうでもいい思考を打ち切つて、おそらく自分を救つてくれた少女に目を向ける。

才人と同じぐらいで、山を駆け回つているような少女だ。うすい薺色の瞳は不思議そうな輝きをたたえている。どこからどう見ても日本人じゃなかつた。

「喋れる、わけないですよね。口ないです」

申し訳なさそうに後頭部ひじきとこをかきながら才人は頷いた。よくわからないピンク少女の時とはちがつて、今度はゆっくりとした動きでだ。

「あ、でも言葉はわかるんですか」

少女はパツと顔をほころばせる。無造作に束ねた髪の毛が跳ねた。

「わたしリュリュって言います。あなたは……喋れないから自己紹介もできませんね」

むむ、と才人は細すぎる腕を組んで、ポンと手を打つた。

喋れなければ筆談があるじゃないか！

我ながら名案だ、と彼は喜んだ。

そしてテントを見回し、彼の知る筆記具がないことに落胆した。そもそも彼は日本語以外扱えない。

高校生英語が精々といったところだ。

リュリュは不思議そうにがっくりと頭を垂れた豆腐を見ている。

「とにかく、害意は一切ないみたいですね。なんとなく引っ張り込んできたけどアタリかも。最近人とも喋つてなかつたし。ちょっと付き合つてくれませんか？」

はにかんだ少女の笑顔に才人は頷くしかなかつた。

\*

「というわけなんです。なかなか難しいわ」

自分の生い立ち、興味、目的などをひとつとめもなくリュリュは語った。

彼女が美味しいもの好きなこと、とにかく魔法でお肉を作りたいということは才人にも理解できた。

「魔法つてなんだ？」という疑問は脇に置くことにする。

肉の代用品かあ。

才人は特段料理が好きというわけではない。

それでも夜や休日にテレビを眺めていると様々な情報が飛び込んでいる。

自分の身体を見下ろす。

当初のふるふる感は失われ、固い。

確か豆腐つて……。

水分を抜き切つたら肉の代用品になつたはず、と思い出す。色んな裏ワザを紹介する番組で見た知識だ。熱さで水分が抜けに抜けた、かさが明らかに縮んだ今の身体。ひょっとしたらその食感を再現できているかも知れない。

固くなつた肉体を強めにつついてみる。

不思議と痛みは感じなかつた。

息を大きく吸い込んだような気分になつて、頭の隅っこから豆腐をもぎとつた。

熱さは感じるのに痛覚は完全に死んでいるようだつた。とにかく、もいだ豆腐を少女に手渡してみる。

「え……ナニコレ？」

ドン引きされた。

だが才人はくじけない。

命の恩人っぽい少女に報いるのだ、と決意していた。

ジエスチャーで「食べろ」と指し示す。

「う、コレを……」

リュリュはじつと豆腐を見つめる。

いきなり身体の一部を手渡され、食えと言われる。

普通に考えれば「丁重にお断りせさせていただきます」と言つべき場面だ。

その点リュリュは一般的な少女じゃない。

量産型の女の子なら火竜山脈に一人で滞在したりしない。

息をのんで、少しだけもぐ。

勢いよく口に放り込んだ。

「むぐ…………あれ？ 案外いける、といふか、味はそうでもないのに食感がお肉っぽい。え、これ豆の味？ なんだろ……」

意外と少女には好評のようだった。

残る塊を小さくちぎりながらも口に運んでいく。

才人は豆腐だから表情の読めない顔で満足そうに頷いた。

国民的ヒーローの氣分が少しわかつたぜ。

マントをつければ空も飛べる気がした。

だが、彼は肝心なことを覚えていなかつた。

「…………もっと、研究する必要がありますね」

ぞくりと背筋が、というより背筋に相当する部分が粟立つた。

この感覚を味わうのははじめてじゃない。

よくわからない石造りの部屋でも感じた例のアレだ。すなわち。

く、食われる！

才人はとにかく駆けだした。

「あっ！ 待ちなさい！！」

後ろからの声は無視した。

\* \* \* \* \*

才人は糺余曲折あつてルイズの部屋に戻った。

「あなたは……土くれのフーケ！」

「“賢者の黒水”の使用法を吐きな！！」

彼はとにもかくにも元の身体に戻る努力をはじめる。

「いいぞ相棒、もっと心を震わせろー。いや体は震わせる必要ねえからー！」

その過程で様々な人と知り合い。

「タルブ村は“トウフウ”の名産地なんですよ？」

少年は精神的に成長していく。

「「、「こんな白い固体が解毒薬とは……」

「シャルロット……」

「母さまー。」

ハルケギニアにとりまく陰謀を薙ぎ払い。

「姫さま、『コレを護衛にする気ですか?』

「あら、白くていいじゃなし。トリステインの白百合にはぴったりだわ!」

人々に笑顔を振りまいて。

「この『白炎』のメンヌヴィル相手は……焼き豆腐だと!?」

「副長、きみは料理人になりきれなかつたよつだな」

決戦の地に一人佇む。

\* \* \*

なあデルフ。俺死ぬかな。

「たぶん。焼き豆腐か豆腐サラダか高野豆腐がお好きなものをどうぞ、つて感じだね」

そつか……結局戻れなかつたな。

空中大陸を吹き荒れる強い風。

才人の身体はふるふると揺らされた。

眼下には七万もの軍勢、単騎駆けでどうにかできる物量ではない。  
彼はじつとかがり火を眺めている。

「まあなんだ、どうせならカツコつけりやいいじゃねえか」

なんで。

「もつたいねえだろ」

それもそうか。

デルフリンガーを構え、静かに走り出す。

お前ら全員。

恐怖と誓いを胸に秘め、一人の豆腐が走り出す。

豆腐の角に。

双月が艶やかに照らす白い勇者は、いつそ神々しかつた。

頭ぶつけて死にやがれ！

才人の勇気がハルケギニアを救うと信じて！

了

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8967y/>

---

白の勇者、あるいは絹のように滑らかな

2011年11月26日22時47分発行